

第 223 回 神戸大学都市安全研究センター RCUSS オープンゼミナール

2017 年 7 月 15 日（土）神戸市役所 4 号館（危機管理センター）



災害リスクと〈home〉への帰還

紀伊半島大水害・福島第 1 原発事故災害の被災地から

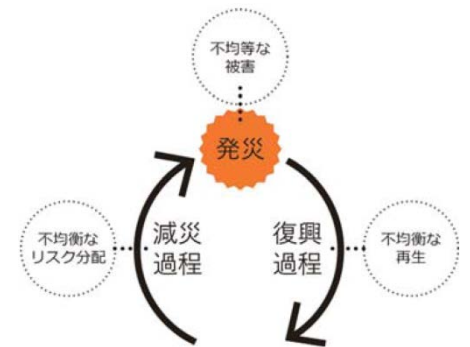
田中正人 追手門学院大学地域創造学部准教授

記録担当：神戸大学北後研究室 クリスティン・ウィボウオウ

東日本大震災をはじめ多くの被災地では、災害危険区域指定や防災集団移転など、移住を前提とした制度が適用されてきた。次なる被災を避けるという点で、移住は確かに合理的な判断のように思われる。しかし一方で、甚大な被害経験と継続するリスクのもとでなお、元の居住地に還るという選択がある。本講演では、紀伊半島大水害と福島第 1 原発事故災害の事例を通して、ふたたび〈home〉への帰還を果たした被災者の意思決定プロセスについてご講演いただいた。

講演内容

発災を機に、復興過程に入り、やがて減災過程に入り、ふたたび災害が起こる。この災害サイクルを通じて、さまざまな不平等が生じている。その根底には居住地の移動があるように思われる。自発的な移動がある一方、災害危険区域指定などによる他律的な移動がある。そこで、災害サイクルにおける不平等の実態をみるとともに、居住地（＝home）に戻る／戻らないこと、戻れること／戻れないことの意味を考えてみたい。



1 被害はどのような不平等を有するのか？

阪神・淡路大震災では、高齢、女性、貧困などに犠牲者が偏っている。東日本大震災でも同様の傾向にある。とくに障害者の死亡率は全体の死亡率の 2 倍に相当する。被害は不平等にあらわれる。

2 生活再建にはどのような不均衡が生じるのか？

新潟中越地震や東日本大震災後の福島県、熊本地震では関連死が直接死の数を大きく上回る。また阪神・淡路大震災では、いわゆる孤独死が多発し、仮設住宅での発生率は徐々に上昇する。災害公営住宅への移行はさらにその問題を深刻化する。留意すべきは、平時の孤独死との違いである。介護や貧困の文脈で生じる孤独死があるのと同様、被災地の孤独死には固有の発生メカニズムがあり、各々を一概に論じるべきではない。



3 不均衡なリスク分配とはなにか？

和歌山県串本町では、南海トラフ地震への備えとして、病院等の高台への移転が進んでいる。それに伴って、住宅についても徐々に移動の兆候がみられる。その実態を調査したところ、日常の移動圏域が小さい高齢単身層が津波リスクの高い低平地に残留し、移動圏域が大きい（モビリティの高い）若年層

ファミリー層がリスクの低い高台へ移る傾向がみられた。コミュニティは地理的に分断され、結果的に津波のリスクは不均等に分配されている。

4 Home に戻ること/戻らないこと、/戻れること/戻れないことの意味

□ 2011 年紀伊半島大水害 奈良県十津川村

紀伊半島大水害は 2011 年 9 月に奈良県南部～和歌山県南部で起こった。全国で死者が 98 名。十津川村では、死者が 12 名、行方不明者が 10 名。十津川村は日本最大の面積の村で、50～60 の集落が村全域に点在している。応急仮設住宅 30 戸が 4 地区に分散的に供給された。災害公営住宅は 17 戸建設され、できるだけ集落を集約するという村全体のコンセプトのもと、既存の 2 集落に付随するかたちで配置された。

仮設住宅が継続している段階での調査によれば、すでに 63% の世帯が戻っており、現在では 7 割以上が戻ったと考えられる。土砂災害のリスクが決して小さくはない集落に、再び戻るという選択がなされた背景には、①農業という生活の営為、農地との信頼関係の継続、②近隣への配慮の意識、集落内の近隣関係の回復、③将来の移転先候補の顕在化による現時点の帰還選択の援護、という 3 点がある。

□ 2011 年東日本大震災 福島県川内村

川内村は福島原発の 30 km 圏内に入っており、一時全村避難となった。その後徐々に避難指示が解除され、2016 年 7 月に村全域の避難指示が解除された。原発から 20 km 圏内に位置し、2014 年 10 月まで避難指示が継続した毛戸地区では、現在 54% (39 世帯中 21 世帯) が戻っている。

被災者へのアンケート及びインタビューによれば、線量・通院不安の少ない非若年単身・夫婦世帯が早期に帰還、線量・通院不安を抱えた多世代世帯が長期避難する傾向にある。後者は避難途中における世帯分離を経て、高齢世代のみの帰還という選択を行うケースが多い。放射線リスクが継続するなか、〈home〉に還るという選択がなされた背景には、土地や家、農地の存在が大きい、そこに単なる道具的・経済的価値以上のものが見出されている点に注意が必要である。

5 どうすれば日常を再現できるか？

生活圏域の重複 → 〈home〉への帰還の選択肢を保障する

生活行動の連続 → 日常の多くを費やしていた対象と時間を再現する

生活空間の相似 → 生活行動を支えていた環境を再構築する

主な質疑応答

コミュニティの話があまりなかったようで、コミュニティについて少しお話をください。また、コミュニティをどう作り出すのか？

コミュニティという言葉は使いませんでしたが、ほぼコミュニティの話をしてきたつもりです。コミュニティという言葉は抽象的でいろいろな捉え方ができるので、できるだけこの言葉を使わずに説明したいと思っています。阪神・淡路大震災でも、しばしば復興過程でコミュニティが壊れたという言い方がされてきましたが、コミュニティが壊れるとは具体的にどういうことなのかあまり見えてきません。

ひとつの見方としては、個と個のつながりが維持されたのか失われたのかという点があると思います。個とは、人と場所の両方があり得ます。〈home〉へ還る 3 つの理由のところ「信頼」という言葉を使いましたが、ここには人と人との信頼関係だけでなく、人と場所の間の信頼関係が含まれます。どうしても人と人の関係に注目が集まりますが、私は人と場所の関係がより根底にはあるような気がしています。